

平成 21 年 5 月 21 日現在

研究種目：基盤研究 (C)
 研究期間：2006 ～ 2008
 課題番号：18520078
 研究課題名 (和文) 現代日本演劇史における西洋演劇の位置：現代演劇の成立過程の再検討
 研究課題名 (英文) The Positions of Western Drama in a history of Modern Japanese Theatre
 研究代表者
 イアン・カラザース (Ian Carruthers)
 筑波大学・大学院人文社会科学部研究科・准教授
 研究者番号 70400603

研究成果の概要：

本研究では、日本の現代演劇の成立過程と現状を、上演テキストに注目して考察することで、日本現代演劇史を見直す視点を提供することを第一の目的として研究を行ってきた。現代日本演劇史において、西洋演劇が与えた影響や、日本演劇が西洋演劇に与えた影響を視野に収めることで、グローバルな視覚から世界演劇史に切り込むことが可能となった。本研究の最も大きな成果は、現代日本演劇史を上記のような視点から見直した結果としての *A History of Japanese Theatre* 『日本演劇史』の出版である。研究代表者は、3年間の研究を基に、研究分担者および研究協力者とともに演劇史の執筆を開始し、ケンブリッジ大学出版局との出版が決まっている。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,700,000	0	1,700,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	570,000	4,170,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：日本演劇史、比較演劇、西洋文学、シェイクスピア、鈴木忠志

1. 研究開始当初の背景

研究代表者 (イアン・カラザース) は、これまで鈴木忠志を中心とした現代演劇を研究してきた。従来日本の現代演劇史は、1960年代アングラ演劇以降についても、「戯曲テキスト」に焦点を絞った文学的記述が中心であるか、あるいは単なる上演史であった。とくに英文で書かれたものについては、入門書・概説はあるが、日本あるいはアジア演劇研究者を讀者とした日本の演劇史がなかった。また、国外で日本演劇が研究される場合

においては、主に能や歌舞伎などの古典芸能がその中心であり、現代日本演劇についての研究があまりにも少ないことに問題を感じてきた。上演研究の視点から、世界演劇という枠組みで、単なる概観ではない、歴史的視点に立つ日本演劇研究の必要性を研究代表者は痛感していた。

研究分担者 (南隆太) は、これまで 16 世紀～18 世紀のイギリス演劇を研究するなか、日本演劇史でイギリス演劇、とくにシェイクスピア作品が果たした役割を、批判的に検討する必要を痛感していた。

2. 研究の目的

日本の近代・現代演劇において西洋演劇は、常に演劇ジャンルおよび演劇運動の成立・拡大・停滞の兆候として、いわば日本演劇の変化を区分する断層線(faultline)として重要な役割を果たしてきた。このような西洋演劇の位置づけを、明治期以降を中心に、西洋演劇研究と日本演劇研究の双方から複眼的に、上演に注目して検証し、そのことで、日本はもちろん、海外の研究者との対話の可能性を開く演劇史の構築を主たる研究目的とした。

3. 研究の方法

(1) 文献と資料を中心とした研究。

研究代表者、分担者、協力者間で主に担当する演劇ジャンルと時代を分け、歴史的な記述をする際の鍵となる演劇上演を分類、分析し、ジャンル間の横断、時代区分間の連続性について定期的に研究会を持ち議論を重ねた。

(2) フィールドワークによる研究。

研究代表者の主たる研究対象である鈴木忠志の創りあげた俳優養成法である鈴木メソッドを用いる劇団「百景社」との共同作業を通して、近代・現代演劇における西洋演劇と身体の関係について考察した。

4. 研究成果

① 平成 18 年度

最大の研究成果は、海外学会に参加して講演や研究発表を行い、当地の研究者研究ネットワークをより一層充実したものにしたことである(詳細は学会発表一覧参照)。これらの海外学会において 18 年度に出版された研究代表者(Carruthers)の著書、(Reading Suzuki Tadashi's 'The chronicle of Macbeth' in Australia)を配布、当該地の日本演劇研究者とのネットワークが確立した。また 10 月にシンガポール大学 Young Li Lan を招き、筑波大学秋葉原キャンパスにてシンポジウムを行った。ここでは、日本とアジアにおける近代演劇と、シェイクスピアに)についてのセミナーを開催し、近代演劇における西洋演劇の位置について、アジアという観点から見直しを進めた。また、同月台湾で行われた呉興國による『マクベス』『テンペスト』『リア王』等のシェイクスピア劇の京劇への翻案上演にも参加した。ここでも、特に『マクベス』の翻案に、黒澤明による『マクベス』の映画化『蜘蛛巣城』の影響が見られる等、日本近代演劇と西洋演劇の相互関係と、アジアにおける演劇を研究するにあたっての大きな成果が得られた。

② 平成 19 年度

フィールドワークによる研究とくに力を注いだ。劇団「百景社」は、研究代表者が研究の拠点をおいた茨城県つくば市に拠点を置く劇団であり、代表者の主たる研究対象である鈴木忠志の鈴木メソッドを用いて、イブセンの『人形の家』、シェイクスピア『オセロ』などの、西洋演劇作品を上演している。この意味で、「百景社」は、日本演劇と西洋演劇の出会いと融合を、演劇上演の場で実践する劇団であり、彼らとの共同の作業から得られるところは実り多いものであった。研究代表者は、鈴木メソッドの理論的な面や海外での実践例を「百景社」に紹介し、「百景社」の活動に新たなる可能性を開いた。研究代表者は「百景社」の実践から、本研究を、東京ばかりでなく、地方劇団を含めた意味での日本演劇の研究に展開させていく必要性を痛感、そのための準備を始めた。また、「百景社」による『人形の家』の制作段階から上演当日にいたるまで、筑波大学大学院生を積極的に参与させ、実践と理論を融合させた演劇研究の現場を学ばせることができたのも、今年度の大きな成果である。この成果は、大学院生の全面的な協力のもと、*A Hundred Views: Ibsen's A Doll's House* (『百景社「人形の家」』)として発表され。この書物が、右開きページが日本語ヴァージョン、左開きページが英語ヴァージョンとなっているところにも、本研究の性質と発信目的先がよく表れている。

研究代表者、研究分担者は、第 46 回シェイクスピア学会で国際シンポジウム“Opening up Dialogues on Shakespeares in Asia”を企画・発表、Alex Huang、Yong Li Lan、Robin Loon、Beatrice Leiらを招聘した。研究分担者(南)は、国際パネル「シェイクスピア・イン・アジア」を企画、呉佩珍(台湾・東呉大学[当時])らと討議を行った。以上の事業により、シェイクスピア作品を代表とする西洋演劇を、日本演劇のみに留まらず、アジア演劇史の文脈のなかで研究する可能性を開拓、研究者ネットワークを強固なものとした。

③ 平成 20 年度

研究分担者(南)は、中国、台湾で開催されたシェイクスピア関係の学会に参加・発表を行い、研究の進展と人的ネットワークの拡大を得た。日本やアジア諸国で翻案上演されたシェイクスピア作品(たとえば、歌舞伎化された『ヴェニスの商人』)が、当該国以外ではほとんど知られていないことが、研究の進展の妨げになっていることを確認、そのような作品を英語に再翻訳し、刊行する計画をたて、そのための準備を行った。

本研究のもっとも大きな成果として挙げられるのは、本研究のテーマと密接に関係した英語による研究書出版の準備を万全のものとしたことである。その目的にむけて、本年度は本研究が目指した日本演劇史の新たな視点を、英語で世界に向けて発信していくための研究書発刊を目指し、資料整備、研究者ネットワークの確立を行った。Jim Brandon (ハワイ大学名誉教授)、J. Thomas Rimer (ピッツバーグ大学名誉教授)、Brian Powell (元オックスフォード大学講師)、Robert Tierney (イリノイ大学助教授)、Yukihiro Goto (サンフランシスコ州立大学教授) をはじめとする国内外の第一線の日本演劇研究者と、綿密な連絡を取り、構想を練り上げた。討議の結果、本研究書は、世界演劇的な視点にたち、日本演劇と西洋演劇の相互交流に注目、また従来英語で発表される日本演劇研究では注目されることの少なかった、近代・現代日本演劇をとくに重要視することで合意を得た。本研究書はケンブリッジ大学出版局より Ian Carruthers, MINAMI Ryuta, YOSHIHARA Yukari (eds.) *A History of Japanese Theatre* (Cambridge: Cambridge University Press, forthcoming) として出版が決まっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 1 件)

① Yukari Yoshihara, "Popular Shakespeare in Japan", *Shakespeare Survey*, 60 巻, 2007 年, pp.130-40

[学会発表] (計 10 件)

① Ryuta Minami, "Thou doth here usurp the name thou ow'st not": Recreating Shakespearean Characters in Japanese Pop Culture," Reception and Transformation of American and English Literature in Asia, National Taiwan University (Taiwan), September 27, 2008

② Yukari Yoshihara, "Which is global, Shakespeare or Manga?" Reception and Transformation of American and English Literature in Asia, National Taiwan University (Taiwan), September 27, 2008

③ Ryuta Minami, "Re-placing Shakespeares on the Japanese Stage" (25 September, 2008), ShakeScene: Inauguration Venture, 国立台湾大学,

2008 年 9 月 25 日

④ Yukari Yoshihara, "Is this Shakespeare?", Renderings: Shakespeare across the Continents, Nottingham University in Ningbo, China (11 September, 2008)

⑤ Ryuta Minami, "How to Read Japanese Shakespeares on Stage" Rendering: Shakespeare across the Continents, Nottingham University in Ningbo, China (10 September, 2008)

⑥ 吉原ゆかり(発表), 南隆太(企画運営)
「シェイクスピア・イン・アジア」

2007 年 10 月 11 日(金曜日) 愛知芸術文化センター 12F アートスペース

他の参加者: Alex Huang (ペンシルバニア大学准教授) Yong Li Lan (国立シンガポール大学准教授) 呉佩珍 (台湾・東呉大学)

⑦ Ian Carruthers, 南隆太 (シンポジウム運営・発表), "Opening up Dialogues on Shakespeares in Asia: Towards a Comparative Study of Shakespeare Performance in Japan"(第 46 回シェイクスピア学会: 2007 年 10 月 7 日: 早稲田大学)
他の参加者: Alex Huang (ペンシルバニア大学准教授) Yong Li Lan (国立シンガポール大学准教授) Robin Loon (国立シンガポール大学助教授) Beatrice Lei (国立台湾大学)

⑧ Ryuta Minami, "All the World's a Stage: Shakespeare as Cultural Mediator." 9 August, 2006. Shakespeare Birthplace Trust. The International Shakespeare Conference 2006. Theme: Stages for Shakespeare's Theatre, 6-11 August, 2006. Shakespeare Institute, Birmingham, UK

⑨ 南隆太, Ian Carruthers (セミナー企画および研究発表), "Re-Playing Shakespeare: Performance in Non-Western Theatre Forms" (Central City Library, Brisbane, 17 July, 2006. The Eighth World Shakespeare Congress. Theme: Shakespeare's World, World Shakespeares, 16-21 July, 2006.)

⑩ Yukari Yoshihara, "Shakespeare Localised /Japanised in the Age of Globalisation", VII World Shakespeare Congress, Brisbane, Australia, July 14, 2006

〔図書〕(計6件)

① Ian Carruthers, 松田幸子 (他共編著)
A Hundred Views: Ibsen's A Doll's House
(『百景社「人形の家」』)、つくば市: 筑波
大学文化批評研究会: 2008年

② Yukari Yoshihara, "Kawakami
Otojiro's Trip to the West and Taiwan at
the Turn of the Twentieth Century", S.
Clark and P. Smerthurst eds. *Asian
Crossings*. Hong Kong UP, pp. 149-162,
2008年

③ 吉原ゆかり「英語で書かれた文学のイン
ターカルチュラルな〈移動〉」筑波大学文化
批評研究会編『テキストたちの旅程——移動
と変容の中の文学』花書房、14-28頁、2008
年

④ Ryuta Minami, "No Literature Please,
We're Japanese," The Disappearance of
Literary Texts from English Classroom in
Japan," Araki, Lim, Minami, Yoshihara
eds., *English Studies in Asia*, Malaysia:
Silverfish Books, pp.145-165, 2007年

⑤ Yukari Yoshihara, "The Past, the
Present and the Future of the project,
'English Studies in Asia' (introduction)"
Araki, Lim, Minami, Yoshihara eds.,
English Studies in Asia, Malaysia:
Silverfish Books, pp.9-23, 2007年

⑥ Ian Carruthers. Reading Suzuki
Tadashi's "The Chronicle of Macbeth" in
Australia, Tsukuba: Tsukuba Daigaku
Bunka Hihyo Kenkyukai, 2006

6. 研究組織

(1) 研究代表者

イアン・カラザース (IAN CARRUTHERS)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所・准
教授

研究者番号: 70400603

(2) 研究分担者

南 隆太 (MINAMI RYUTA)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号: 60247575

(3) 連携研究者

・ 吉原 ゆかり (YOSHIHARA YUKARI)

筑波大学・大学院人文社会科学研究所
科・准教授

研究者番号: 70249621

・ 清水 裕之 (SHIMIZU HIROYUKI)

名古屋大学・大学院環境学研究所・
教授

研究者番号: 0187463

・ 本橋 哲也 (MOTOHASHI TETSUYA)

東京経済大学・コミュニケーション学
部・教授

研究者番号: 20230047

(4) 研究協力者

・ Brandon, Jim

ハワイ大学・名誉教授

・ Rimer, J. Thomas

ピッツバーグ大学・名誉教授

・ Powell, Brian

元オックスフォード大学講師

・ Tierney, Robert

イリノイ大学・助教授

・ Goto, Yukihiro

サンフランシスコ州立大学・教授

・ 呉佩珍

政治大学 (台湾)・助教授

・ 松田 幸子

筑波大学・大学院後期課程